慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会学はいま、何をなすべきか : わたし自身の回想的・ 内省的な模索 (戯れ)
Sub Title	
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1996
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.1 (1996.) ,p.26- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 社会学はいま、何をなすべきか
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19960000-0026

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会学はいま、何をなすべきか
－わたし自身の回想的・内省的な模索（戯れ）－

川合 隆男

（Ｉ）『三田社会学』編集委員会の諸兄諸姉氏より逃げることなく書くように与えられた論題は、「社会学はいま、何をなすべきか」といういかにも難しいもので、いささか脅迫感を覚えるものでもある。わたし自身はもう50才台半ばを過ぎて、峠道にあって自ら歩み生きてきた道程を半ばふり返り、半ばこれから歩むかと願う道筋を思いうかべながら、社会学界との極めて限られたかかわりのもとで、わたし自身がいま、何をなすべきか、何をなし得るのかを覚え書き的に書きとめておきたい。

わたしが東北の地方都市の県立山形工業高校（建築科）をどうにか卒業して、慶應義塾大学法学部政治学科に入学できたのは、1957年（昭和32年）の4月であった。先日『三田新聞』の古い記事を調べていてその時の4月の三田新聞に新入学者名がクラス毎に発表されており偶然にもそこに自分の名前を見た時には自らの歩みの刻印を確かめる思いがした。片田舎から出てきた田舎者の学生には、大都会の生活は新鮮で驚きの連続であったが、文学や映画、キルケゴールやサルトルの実存哲学、喫茶店と安酒、インド・ネルーらの非同盟中立主義、安保闘争などと揺り動きながら、学生生活を過ごし、ゼミは米山桂三先生の研究会に入れていただいて、卒業論文は『農村社会の展開構造－農村の都市化、近代化問題－』と題するものであった。自分が育った近郊農村をフィールドにしつつも随分と大きな論題でいく度見直しても恥ずかしい限りのものであった。

1955年頃から1965年頃にかけての世の中の動きは、農業・農村社会から都市化社会へと大きく変貌していき始める時期であり、農業基本法や構造改善事業、生産性向上運動や経済成長、安保闘争などをめぐる戦後日本の激動の始発期ともいえる時期であった。社会学においても都市化論、産業化論、近代化論、大衆社会論、疎外論などが大きく論壇をにぎわし、構造機能主義とマルクス主義社会学が相い対して全盛のときであった。「敗戦の苦い経験がもたらした貴重な教訓のひとつは、単にその場限りの着想や、徒らに抽象的な論議をもって、科学を語り国策を論ずることが、いかに重大な禍いを招くものであるか[1)]」という問題意識から理論と実際を問い始めた昭和20年代の戦後日本社会学も、昭和30年代にはかなり理論志向やイデオロギー志向の強いものに変容しつつあった。社会調査の試みも問題発見・仮説構築・理論構築型よりも、問題検証・仮説検証、理論検証型への調査へと転換する傾向が強かった。

以後1960年代よりほぼ30年余を経る間に、いくつもの画期的な理論的パースペクティブが変転し競合化してきた。注目すべき理論的・実証的研究も生み出されたともいえる。し

かし、現に生きる人々の生き方、暮し方、感覚や価値に照らしてさまざまに急速な社会変動に直面しつつあるにもかかわらず、「社会学者」と称するものが相変わらず、固定的な概念や理論偏重志向で、頭と手に偏重して、同時に足と体全体をも活用して現にフィールドを歩いて考えることの大切さや楽しさ、苦しさを忘れていないだろうかと考える。生きものとしての人間というフィールドにしろ、地域にしろ、家族にしろ、食べるというフィールド、死というフィールドにしろ、さまざまのフィールドのなかから人間の営みと人間関係を感じ慈しみ、育て、拓いていく試みが、いま問い直されているのではなかろうか[2)]。フィールドワークの重要性とフィールドワークからの社会学的想像力・構想力が問われているのではなかろうか。

（II）1963年（昭和38）の新春に締切り間際に提出した修士論文は『社会移動と村落構造の変容』と題するものであった。卒論と同じ近郊農村を対象フィールドにして地域移動・階層移動の視点を軸に村落構造の変容を考察してみようとしたものであったが、殆どが未発表のままであるが、わたし自身の社会学的な問題関心の原点でもあったのかもしれない。その後の博士課程や助手時代の研究関心は、発展途上国（当時は「低開発国」「後進国」といった用語が用いられることが多かった）の社会発展、広島での原爆被災者の原爆被災による生活変動・社会変動に関する調査研究を試みたものであった。広島での調査研究にいわば没頭していたところがあったようにも思える。

1970－71年（昭和45－46）にかけての1年間のアメリカ留学（遊学）では、距離をおいて国際的な比較社会学や社会成層（階層論）の理論的な側面に関心をおき少しは研究を進めることができた。若い新進の社会学者ギルバート・ローズマンなどと知り合ったのもアメリカのキャンパスを通じてであった。帰国後は、わが国の社会学の歩みや社会調査史に関心が向かい、「月島調査」の再掘、月島調査の実施、更に進んで近代日本の社会調査史研究[3)]、近代日本社会学史研究[4)]へと歩ませることになって今日に至っている。この間に、『社会成層の研究－現代社会と不平等構造－』（1975年（昭和50）博士論文として提出）[5)]、教授論文として『近代日本における新中間層の形成と動態』（1976年）を書いた。月島調査では友人達や大学院生、学生さん達の協力を得てまたしても社会調査の面白さや難しさを味わうことができた。調査史研究では他大学の研究者仲間とともに「社会調査史研究会」をつくり、現在も継続して研究会が繰り広げられている。また近代日本社会調査史研究では多くの大学院生と一緒に仕事をする機会を得てとても楽しかったし、訪問研究員として来塾していたドイツのレギネ・マティアスさんや韓国からの留学生金勲さんなど他の外国人留学生の人達とも出会えたのは幸運であった。1988年（昭和63）の韓国、1989年（平成元）のイギリスへの遊学もそれぞれ半年間の短い滞在であったが、わたしにとっては新しい体験とさまざまな出会いをもたらしてくれた。

目下のわたしの研究テーマはより広く近代日本社会学史研究にある。しかし、わが身の

歩みを少々ふり返えると、はたして戦後日本の社会的現実と自らどれだけの葛藤をして、学問的な歩みを試みてきたのか、それぞれの問題関心・研究関心をそのつどどれだけ深め持続してきたのか、を反省せざるを得ない。いたずらに自らの関心のおもむくままに進め走り続けてきた感がする。自らの歩みのそれぞれの段階で絶えず問い返し自己省察していくことが必要であったのではなかろうか。自らをとりまく社会的現実の動きと自らの問題・研究関心と学界の学問上の潮流・論壇の問題・研究関心とがそれぞれが、三つどもえに重なりつつも絶えず緊張関係として存在している筈である。にもかかわらずわたしのように自らの関心にのみこだわり続けるのは戒められるべきだとも考える。しかし、自らの関心を見失い見定め得ず学問上の潮流や論壇の動きに「過剰反応」し「過敏症候群」に陥ることも戒められることかもしれない。

加えて、社会学史研究に関していえば、「社会学は、いま、何をなすべきか」を問うことは社会的歴史的現実の歩みに照らして社会学、社会学者は「何をなしてきたのか」を批判的に継承していく問いとも連なるものであると考える。社会学が学問として役立っていくには、先人達が歩み培ってきた学問的遺産としての社会学的遺産（sociological heritage）を継承し批判的に活用していくことが必要であろう。近代日本社会の展開、帝国主義日本、軍国主義日本や植民地支配などとのかかわりで、あるいは戦後日本社会において社会学や社会学者はどのようなかかわりや役割を果たしてきたのか、社会学的分析や考察は社会学の歩みや社会学者自らにも向けられるべきであろう。今日さまざまの関心から学説研究、学説史研究がとみに盛んであるが、このような観点からの学史研究ももっと盛んになされてもよいのではなかろうか。

(III) わたしが日本社会学会に入会したのは、自分自身の研究方向すらまだまだ定かでもない修士課程のときか助手時代であったと思う。当時は「現代社会学におけるM・ウェーバーの意義」とか、「戦後日本社会学の総括と展望」とか、「現代日本の都市問題」とかいった大きな統一テーマを軸に学会大会が開催されたりしていた記憶が強いが、最近では多勢の研究者による研究上の専門分化、細分化の傾向が著しいという印象をもっている。本年度（1995年度）の第68回日本社会学会大会（都立大学）に報告参加したが（わたしの報告は「戸田貞三の社会調査論の展開」）、多様に分化し割拠している社会学界の多彩さと活力を垣間見る思いがした。戦後50年にして漸く学問活動としての社会学会の活動も定着し制度化されてきた感じをもつ。

しかし、わたし自身がこれまで地域社会研究、成層論、調査史研究、日本社会学史研究などを中心にして専門分化の必然性とその効用、重要性を一方でみとめつつも、わたし自身の日常的な暮し方自体や生活関心の変容、生活上・社会上の、そして学問上の「境界」の喪失状況に身をさらすときに、他方では個別学問上の専門分化・細分化の著しい動きはかえって学問志向を固定化し自己閉塞化、疲弊化していくことに作用しないかどうかをお

それるのである。やはり、両者の歩みは歩み寄ることのない並行道ではなく、円環としての構図のもとに位置づけられるべきであろう。日常的な生活や社会的世界こそが根底・土壌にあって円環の構図が描かれるべきであろう。そうでないと科学的学問がまさにデマゴギー化し人々の生活や社会そのものから遊離し、そのものをも壊滅しかねない。

学問としての社会学は（既成の）「社会学者」によって独占されるものでもない。「社会学者」も限られた社会学会や社会学界の「世界」に自らを閉じ込める必要はないのである。ひとりひとりの人間として野生に広くさまざまに学問的な関心を切り拓いていくべきであろう。われわれは依然として、大地とともに揺れ動く、未知の野生の人間世界に直面しているのである。

合間に市民農園を利用して野菜づくりを楽しんでいる。冬空のもと裸地では寒かろうと散歩道で落葉を拾って敷いたりして土壌造りの難しさ、大切さを感じているが、ワープロやパソコン操作と同様にこちらの思うようにいかないことを実感することしきりである。倦むことなく飽くことなく、人間が繰り広げる人間関係の構造を絶えず解明し続けていくことが社会学にかかわる学徒に与えられている課題である。ひとりひとりの人間の尊厳と自由、共に生きる喜びと哀しみを見据え、人々の繰り広げる営みを創造的に批判的に解明し少しでも支え励していくことのできる社会学の展開とあり様がいま問われている。たかが社会学、されど社会学というべきだろうか。（1995年12月）

1)民族文化調査会編『社会調査の理論と実際』青山書院、1948年、「刊行の言葉」1頁
2)川合「日本社会学の最近の動向と反省」『法学研究』63巻3号、1990年3月
3)川合編著『近代日本社会調査史』（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）、慶應通信、1989年、1991年、1994年
4)川合「解題『社会雑誌』『社会』『社会学雑誌』（『明治期社会学関係資料』（全10巻））、龍渓書舎、1991年、川合「解題、日本社会学院と『現代社会問題研究』業書」（『現代社会問題研究』業書、全25巻）、龍渓書舎、1993年、川合（監修）『戸田貞三著作集』（全15巻）、大空社、1993年
5)川合『社会的成層の研究－現代社会と不平等構造』世界書院、1975年

(かわい　たかお　慶應義塾大学法学部)